

病態・類似疾患別心エコー図検査のルーティン [Web 動画付]

小谷 敦志(編), OSAKA 心エコー研究会(執筆)

仙波内科医院

種村 正

臨床現場に寄り添う、 心エコー検査の“教科書以上”の一冊

私と小谷敦志氏が親しくなったのは、それほど昔のことではありません。学会などで同氏のご活躍は存じていましたが、直接の面識はありませんでした。2009 年ごろ、東大病院の竹中克先生から「近畿大病院の小谷さんが検体検査に異動させられて“ダークサイド”に堕ちているぞ」と聞かれ、なんて気の毒なことだろうと心配したのを覚えています。

その後、2011 年 5 月に開催された日本超音波医学会第 84 回学術集会(大会長 竹中克先生)の際に一緒に杯を交わしたことが、交流のきっかけでした。同年の 2 月、ようやく生理検査に復帰されたそうですが、自分の進むべき方向性について葛藤を抱えておられました。研究に取り組む中で「医師と同じように進めてよいのか?」という迷いがあり、私自身もかつて悩んだ経験があったため、「技師は技師としてのプライドを持ち、得意分野で勝負すれば良いのでは?」と話した記憶があります。それが妙にふに落ちたようで、小谷氏の生き方に何らかの影響を与えたのかもしれません。

それ以来、小谷氏は 2014 年には初の共著となる血管エコーの単行本を、2016 年には心エコーの単行本を出版することができました。また、日本超音波検査学会では編集委員長を担当され、学会誌の編集にも尽力されました。

そんな小谷氏が満を持して初の単独編集に挑んだのが本書です。執筆は OSAKA 心エコー研究会の若手メンバーと小谷氏が担当しています。本書は『臨床検査』Vol.66 No.4(2022 年 4 月・増大号)を書籍化したものであり、内容を大幅に改訂するとともに、計 158 本もの Web 動画を収録しているのが特長です。私が本書を手にした際の第一印象は、「エコー画像が美しい」の一言に尽き

ます。私は画像に厳しい評価をするほうですが、本書の画像はまさに“見る人に訴える力”があります。古くから「百聞は一見にしかず」と言いますが、それは心エコーにも通じるもの。どんなに豊富な知識があっても、実際に見て経験しなければ臨床に生かせません。「まず私たちの撮った画像を見てほしい」という執筆陣の熱意が感じられます。

心エコーを始めるに当たっては、画像描出・計測・記録・レポート作成といった一連のルーティンを身につける必要があります。そして日々の臨床の中で経験を積み、知識を増やし、適切な“引き出し”を開けて判断していく。その“引き出しの整理”に初心者には苦勞しますが、本書は病態・類似疾患別に整理するという画期的な視点を提供しており、臨床の思考プロセスに即した内容です。

どのような所見に対して、何を考え、何を計測し、どうグレード評価し、どうレポートをまとめるか—それらが簡潔に示されています。計測項目・評価断面・時相・基準値が一目でわかる構成も秀逸です。また、レポート作成を効率化し、表現力を高める“鉄板フレーズ”も充実しています。SHD(structural heart disease)への対応も手厚く、TAVI(transcatheter aortic valve implantation)後などの治療評価にも応用可能で、ベテランにとっても有用です。

まさに臨床現場に寄り添った、心エコー検査の“教科書以上”の一冊であると言えるでしょう。



●AB 判/頁 288/2025 年
定価: 6,820 円
(本体 6,200 円 + 税 10%)
[ISBN978-4-260-05979-4]
医学書院 刊